＊８人制サッカーを学ぼう

①　８人制を導入することのメリット

●　選手のプレー機会を増やす８人制サッカー

１１人制から８人制になることで、試合に出られる選手か少なくなるのでは？
８人制のグランドは、大人のサッカーグランドの半分程度の大きさなので２面を使うことができる。一度にピッチに立つ人数は、１１人制の場合、１１人×２チームの２２人で８人制の場合、８人×２チーム×２面で３２人が一度にプレーすることができる。
８人制を導入するための一つの理由に「選手のプレー機会を増やす」というものがある。
１試合あたりの人数が減ることから、選手がボールにさわる機会が増える。

●　８人制サッカーの導入は、日本サッカーが世界のトップへ近づくための一歩

サッカーはプレーすることで上達するものです。公式戦や真剣勝負など、厳しいゲームを繰り返し経験することで、選手は成長していきます。人数が減ることによりプレーの機会が増え実践を経験する数も多くなります。選手は実戦を通じて「試合で通用する技術」を身につけていくようになる。
その意味でも、公式戦はもちろん、練習試合などでも８人制を積極的に導入することが、選手を育てるために適した方法といえるでしょう。
また、複数エントリー制の採用により、これまでベンチにいた選手も試合を経験できるようになります。これは選手育成において大きなメリットです。
ヨーロッパの強豪国の多くが、Ｕ－１２年代で少人数制を取り入れています。日本でもようやく導入されることになり、世界のトップへ近かづくための一歩になると思います。

②　一人審判制の導入

●　グランドが２面とれる場合や、複数エントリーの場合、審判の数がたりないという事が起きる可能性もあります。そこで、「一人審判制」を積極的に取り入れていきます。
審判がひとりになると、ファウルやボールアウトの判定など、見間違えることもあります。
そこで大切になるのが「フェアプレーの精神」です。
選手は自分の足に当たってボールが出た場合、自己申告をし、相手にボールを渡す。
審判があきらかに間違えた判定をしたとしても、ベンチも選手も異議をとなえず受け入れる。審判は試合を円滑に運営するための仲間であり、決して敵ではありません。試合中、ベンチがヒートアップし、それが選手たちに伝染した結果、プレーが荒れるケースがよくあります。これは育成する視点からみると歓迎すべきことではありません。「一人審判制」を取り入れることで、ピッチ内の選手だけでなく、指導者や応援する人たちの「フェアプレー」精神も見直す機会になると考えます。

③　フォーメーション

●　積極的にボール関わろう

日本サッカー協会が推奨しているのは、２－３－２です。これは最終ラインが２人、中盤が３人、前線が２人のシステムです。２－３－２のシステム同士が試合をすると、各ポジションがマッチアップする（１対１になる）形式になり、８人制導入の「個を伸ばす」という観点から、理想的なシステムとされています。

１対１の場面が多くなると、選手一人にかかる責任が重くなります。責任の重いシビアな状況でのプレーを繰り返すことで、選手の成長に役立つと考えられます。また、攻撃のときにリスクを冒して攻め上がればチャンスになる一方、守備が消極的になると、失点に直結します。試合に勝つためには、選手一人ひとりが積極的にボールにかかわることが求められます。

●　２―３－１と３－３－１

２－３－２を採用し、最終ラインが２人になると、ピンチを迎える回数が増え、失点につながるケースも増加します。そのことから、リスクの少ない３－３－１のフォーメーションで戦うことが主流になっているようです。ピッチの横幅に３人を並べると、無理なくスペースを埋めることができ、相手ＦＷが２人または一人でも数的優位の状態で守ることができます。試合に勝つため、強豪に勝つために失点のリスクを減らす。そのために最終ラインに人数をかけて守ることは理にかなっています。

しかし、８人制を導入するための理由「個を伸ばす」ことから考えると、最終ラインに選手を余らせてプレーするよりも、１対１の状況でボールを奪えば有利、抜かれれば失点という、シビアな状況でプレーさせることが大切だという意見もあります。

これはどちらがいい、悪いではなく、考え方も問題です。８人制（小学生）のうちから、「数的優位を作って守らせる」という考え方もあり、「個を伸ばすために、数的優位はなるべく作らず、個人の能力で勝負させる」という考え方もあります。

子供たちの成長を願い、日々指導している指導者は、いろいろな考え方があるもの。大切なのは、保護者が理解すること、理解する姿勢をしめすことだと思います。勝った負けたという結果だけを見て意見を言ったり、良し悪しきを決めることは、お互いにとっていいことではありません。また、指導者と保護者のあいだで板挟みになる子供たちにとってもプラスとはいえません。

その意味でも８人制の導入は、指導者と保護者のＵ－１２年代に対する考え方を改めて見直す、いい機会になるといえるのではないでしょうか。

④　８人制の楽しみ方（観戦術）

自分のお子さんがどのようにプレーしているか？　またチームとして、どのようにプレーしようとしているか？　を理解することができるとサッカーの見方が深まり、サッカーを

見ることが楽しくなると思います。
８人制の試合を観戦する際の１つ目のチェクポイントは「積極的にボールにチャレンジに行っているか？」です。８人制は、選手ひとりにかかる責任が大きくなります。ひとりがボールに対する寄せをおこたれば、そこから守備に穴が開くことも十分考えられます。選手が休んでいる暇はありません。自分のお子さんがボールウォッチャーになっているのか、それとも積極的にボールにチャレンジに行っているのか、チェックしながら見てみるのも面白いでしょう。
２つ目は「素早い攻守の切り替えが出来ているか？」です。１１人制に比べて、グランドが狭いため、自陣ゴール前から相手ゴール前へ素早くボールが移動し、ゴール前の局面が頻繁に生まれます。そのため、攻守の切り替えを素早く行うことがポイントになります。ボールを奪った後、素早くゴールに迫っているか。ボールを奪われた後、足を止めることなく奪い返しに行っているか。ボールが寄ってくるのを待つのではなく、自分から奪いに行くのが良いプレーです。
３つ目は、「狙いのあるパスを出しているか？」です。ピッチが狭い８人制では、狙いのあるパスが２，３本つながれば、シュートチャンスが生まれます。味方に身体能力に優れた選手がいて、その選手を目がけてロングボールを蹴り、こぼれ球を拾ってシュートへ持ち込むプレーもありますが、こぼれ球を確実にモノにすることができない限り、マイボールにできる可能性はフィフティ・フィフティです。それよりも、意図のあるパスを数本つないだほうが、ゴールにつながる可能性は高まります。やみくもにボールを相手陣地に蹴り込むのではなく、意図のあるパスを何回つなぐことができたかをチェックするのも、通（ツウ）の見方です。
ここにあげた３つ以外にもチェックポイントはたくさんあります。パスやドリブル、シュートの「現象」だけでなく、子供たちが何を考えてプレーしたのか？チームとして、どのようなことをしようとしているのか？という「意図」を読み取ることができると、さらにサッカーを楽しんで見ることができるようになると思います。

⑤　８人制では役割が変わるＧＫ

● ＧＫをうまくつかおう！

８人制になり、役割が大きく変わるポジションがＧＫです。人数が減ることから、ＧＫがより積極的にボールに関わることが求められます。ＧＫがフィールドプレイヤーの意識を持ち、最終ラインのパス回しに参加できることができれば、有利に展開することができます。現代サッカーでは、ＧＫに求められる要素が多くなってきます。パス回しなど、組み立ての部分でも貢献することが、いいＧＫといえるでしょう。
８人制はグランドが狭いため、ＧＫが正確なパスを前線に通すことができれば、瞬時にシュートチァンスになります。このことから、８人制のポイントは「ＧＫをうまくつかう」といえるのではないでしょうか。

⑥　よりよい選手育成へ

日本サッカー協会が８人制を導入するにあたり、元になる考えがあります。それは、日本代表が各カテゴリーで世界大会に出場した際に出た４つの課題です。

１「１対１の攻防」　２「ボールを失わずにゴールへ向かう」　３「ペナルティエリア近辺の攻防」　４「チャンスを感じる力・リスクを冒す勇気」です。

この課題を克服するための「個の強化」の手段として８人制（スモールサイトゲーム）が導入されました。

●　試合を通じてサッカーを学ぶ

大切なのは選手のプレー回数を増やすこと。人数を少なくすることで、ボールにさわる回数は増えます。また、一人の選手がサボればすぐにピンチになります。逆に、一人の選手がリスクを冒して攻め上がることで、シュートへ持ち込む可能性もアップします。

一つひとつのプレーに対する責任が重くなり、ゴールに直結する厳しい状況での実戦経験を積むこと、また、攻守にわたってプレーする必要性が増すので、「チャンスを感じる力・リスクを冒す勇気」の重要さに気づく機会も頻繁に訪れるでしょう。

その意味では、これまで多かった「練習で身につけて、試合で発表する」という考え方から脱却し、試合を通じて学ぶ、試合を通じて技術や判断力を身につけていくという、サッカーというスポーツの原点に立ち返る、きっかけになるといえるのではないでしょうか。

新しい取り組みをするときは、初めからうまくいくとは限らないもの。指導者、保護者が８人制を導入する意図を良く理解して、「プレーヤーズファースト」の気持ちで関わっていくことが、子供たちのために、よりよいサッカー環境が実現する第一歩といえるでしょう。

＊　保護者向け情報サイト　「サカイク」より抜粋し、まとめました。

４種技術部　　神取　一弘